

11月26日収録生放送用声劇台本①

11月26日収録生放送用声劇台本①
「ドタバタはろういんパーティー」

台本作成：花琳(@sekhmet_karin)

チ「翔殿、日本には、はろういん、を楽しむ人々が増えているらしいですぞ」

翔「ハロウィン、ですよチーリンさん。」

チ「はろ…ういん。」

マ「ハロウィン。」

チ「分かれば言えなくてもいいのではないですか？」

マ「これだからジジイは」

翔「まあまあ、マルキオさん笑笑 で？ハロウィンがどうしたんです？」

チ「仮装、をすると聞いたので一つやってみようと思ひましてなあ」

翔「チーリンさんが仮装を??」

チ「みんなで、に決まっておるのではないですか」

マ「俺もか!?やらねえぞ」

チ「はっはっは、そう言うとおもって一番簡単な仮装を考えておきましたぞ」

マ「嫌な予感しかしねえな」

翔「同感ですね笑」

チ「酷いですなあ、マルキオ殿にはとっておき、狼男を用意したというに」

翔「ははあー、このなにやらモコモコしたのを尻尾に巻き付けるわけですね」

チ「さすが、翔殿は話が分かりますなあ」

マ「…お前らは何やるんだ?てか尻尾に包帯絡まってんだけど」

チ「その包帯は尻尾でなくて頭に巻くんですぞ」

翔「狼男にミイラ要素がはいってるんですねえ」

マ「なんでもありだな」

チ「翔殿には吸血鬼を」

翔「またベタな…でも蹄はどうするんです？」

チ「それなら麒麟はいかがですか？」

翔「あなたの仮装を!？」

チ「蹄が活かされますぞ」

翔「それはまあ…そうですがその仮装誰も分からないでしょうから吸血鬼でいいです…貴方は？」

チ「キョンシーに扮してみようと思っておるところでしてな」

マ「なんだそりゃ」

翔「中国版の死体妖怪ですね」

チ「まさに」(満足げに)

マ「どうせ自分たちのも用意してんだろ」

チ「よくわかりますなあ！！準備万端ですぞ」

翔「うわぁ…これは…キバもあるんですね、血糊も」

チ「そこで相談が」

マ「今度はなんだよ」

チ「キョンシーの被り物が角が邪魔で被れないので手伝ってほしいんですなあ」

翔「…まったく貴方って人は…普通そこまで考えて仮装選びますよ？」

マ「勝手にやってろ、俺は尻尾と格闘すんのに忙しいからな」

翔「結構乗り気ですねマルキオさん笑」

マ「翔、お前が一番楽なんだからチーリン手伝ってやれ」

翔「はいはい、かしこまりました」

《いち早く仮装を終えた翔、チーリンの仮装を手伝う》

チ「戴冠式さながらだと思いませんか？」

翔「言われてみればそうですね…って感心してる場合じゃなくてですね、角通す穴も作ってないなんて思いませんでしたよ！？」

チ「翔殿は裁縫もできるんですなあ、いやあさすが」

翔「貴方本職なんだから確実に私より上手いはずですよね！？」

チ「はっはっは、バレましたかな」

翔「まったくもう…はい、かぶれましたよ。あとは自分で調節できますね？」

チ「なかなかいい具合ですぞ」

マ「おー出来たか」

翔「マルキオさんサイズの狼男いたらたまりませんね」

チ「なかなか恐ろしい出来栄え。はっはっは、愉快愉快」

マ「それ褒めてんのか！？」

翔「似合ってますよ笑笑」

マ「ほんとか？？バカにしてねえか？！」

翔「まさか。全員着替え終わったわけですが仮装したら次はなんです？」

チ「ちゃんと調べておりますぞ！えー……仮装をした子供たちは近所の家を訪れてお菓子をもらい、楽しむ」

マ「子供お！？」

翔「私たちは仮装の対象ではないのではありませんかチーリンさん」

チ「近年は大人もファンタジックも仮装を楽しむ、と聞いたような…」

翔「あやふやですね…」

マ「どうすんだこれ」

チ「記念に写真でも撮って内輪で宴としましょうぞ」

«ドタバタな内輪だけのハロウィンパーティー(?)は賑やかに過ぎて行きました。
そして、ひと月がたった今日»

翔「ハロウィンのこともありましたしどうせまたクリスマスだのと言出しそうだと思いますか」

«翔、マルキオ、写真を見ている»

マ「そうだなあ…チーリンなら言出しかねないな」

翔「振り回されてばかりな気がしますね」

マ「ん。いや、俺はおまえほど振り回されてねえから。」

翔「終わってみると良い思い出ですから、まあ笑笑」

マ「ふん、物好きだな」

チ「お二人ともここにおられましたか！いや～～いいことをお客様から聞きましてな？くりすます、という華やかな行事が」

マ「来たぞ」

翔「言ったそばからですね」

チ「??ご存知でしたかな？ならば話は早い、翔殿、けえきとやらを食べてみたいのですが作れますかな？」

翔「やれやれ」

おわり

11月26日収録生放送用声劇台本②

11月26日収録生放送用声劇台本②
「はじめてのおつかい～初めてのストーカー～」

台本作成：一葉(@mobu_ritu)

いづな(以下い)「ふんふんふーん♪」

刃「おおっ、いづなではないか!!こんなところで会えるとは!これから僕の家に遊びにこんかの? お菓子もた〜んと用意してあるぞ♡」

い「あっじいじ!こんにちは!!行きたいけど、ママにおつかい頼まれたからいかない!さっさと行ってさっさと戻るのがかっこいい漢(おとこ)なんだぞ!!」

刃「お、おつかいと!?大丈夫かのう、まだそんな歳で…最近の子は何をするのも早いものじゃなあ。…共に行きたいが、いづなも頑張っておるのだしな。過保護がすぎるのもよくないのかもしれん…。よし、いっておいで。車にはくれぐれも気をつけるのじゃぞ」

い「うん、いってくるぞ!!ばいばいじいじ!!!」

刃(ああ〜いづなにはああ言ったもののやはり心配じゃ…。最近色々物騒じゃと聞くし…。そうじゃ、いづなは天使のように可愛いのじゃからどこの誰ぞに拐(たぶら)かされたり、酷いことをされてしまったりするのもしれん……!!)
「こうしてはおれん、いづなを守らなければ!!!」

刃「いづなは僕が守るぞ!!」

刃「しかしいづなにはああ言ってしまったから、影から見守るだけにしておこう…。もしよからぬ輩(やから)がおったら即刻(そっこく)刃の錆にしてくれるわ…」

董「…!あれは…、先生、こんにちは」

刃「ああ、鎌鍔のか、奇遇じゃな」

董「はい。…先生、本日はご予約はおありでしょうか?少々お聞きしたいことが…」

刃「すまん、今日は忙しゅうてな。お前さんさえよければ、また明日にでもお邪魔しよう」

董「そうでしたか、いえ、こちらこそ急にすみませんでした。…それでは」

刃「ああ、またの」

董(そういえば刃先生、今日は大人のお姿だった。それにあんなに真剣なお顔をなさって…、よほど大事なご用事がおありなのだろう。…刃先生のご用事…気になる。……少しついて行ってみようか)

刃「さてさていづなはどこまで行ったかの…」

リンゴ(以下リ)「あー、刃!!!こんなところで会うなんて奇遇ですね!」

刃「…なんじゃお前さんか、どうした」

リ「こんにちは!どうして今日は大人の姿なんです?」

刃「ちょっと用がな」

リ「んー?あっ、あれは…いづな?…刃もしかして…ストーカーですか…? やめた方がいいですよそういうの…、嫌われますよ」

刃「ちがわい!!」

僕はおつかいに行くかわいいかわいいいづなを陰ながら護衛しておるんじゃ!!
すとーかーなどと一緒にするでない!!」

リ「え…それってストーカーですよねやっぱり。…もう、通報されても知りませんか?今は大人の姿ですし、余計に怪しいです」

刃「大きなお世話じゃ!そんなヘマはせんわい」

白「おっ、刃のじーさんとリンゴ、こんなところで何してんだ?」

刃「おお、白。僕はいづなの護衛の最中で、こやつに絡まれておるのじゃ」

リ「もう、なんですかその言い方!心配して言ってるのに!!くれぐれも気をつけてくださいね!!」

刃「わかっておるわ!お前さん、配達途中じゃろう?はよ行かんか!!」

リ「も~!刃ってば頑固なんですから!!それじゃあ、また今度!」

刃「じゃあの一」

白「なんだよ刃のじーさん、そっけねえな」

刃「あのテンションで何十年も共におればいやでもそっけなくなるわい」

白「ああ……、っと、オレも用事があるんだった。そんじゃあまたな」

刃「おお、またの」

太陽(以下太)「…おもしろいもんみーつけ」

刃「まーったくばばあは口うるさくてかなわんのう……おっ、醤油屋についたの」

い「おしよーゆ1本ください!」

お店の人「はいよー」

刃「ああ~ちゃんと買えておる…えらいのういづな…さすがは僕の孫…」

フォースペード(以下フォ)「じいさん何してんだ?」

刃「!?…誰かと思えばフォーではないか!!!ああ~最近顔を見とらんから心配しとったんじゃぞ?ちゃんと飯は食べておるのか?ひもじい思いはしておらんか?」

フォ「大丈夫だって、こないだ会ったばかりだろ?相変わらず大袈裟だなじいさんは」

刃「大袈裟なものか!可愛い孫たちの事は心配してもしきれんわい…ああ!」

フォ「うおっ、どうしたんだよ?」

刃「いづなが…いづなが料金ぴったりに小銭を出しておる……!あそこ4歳じゃぞ!?天才じゃないかの!?!?」

フォ「あー…、そうだな、すげえな。……あっ、そうだ、俺配達の途中なんだったわ。それじゃあまたな、じいさん」

刃「おお、残念じゃのう…気をつけて行くんじゃぞー!!!」

刃「はあ~~それにしてもいづなはちゃんとおつかいできておったしすごいこのう、かわいいし…フォーも随分たくましい美男子になっとるし…もしや2人はすかうととやらをされて、あいどるというやつになってしまうかもしれん…」

???「ちょっと」

刃「いつかてれびにもでたりしてしまうのかのう…じいじは嬉しいけどちょっと寂しいぞいづな…ふおー…」

???「あの」

刃「なんじゃ喧しい、僕は今いづなを見守っておるのじゃ邪魔をするt」

警「警察ですけど」

刃「…は？」

警「白髪の男があの子をつけてるって通報があつてね、ちょっと署まで同行願えるかな」

刃「ええい触るな僕は今忙しいのだ!!!無駄話をしとる間にいづなに何かあったらどうする。それに僕はあの子の祖父のようなものじゃ、警察なんぞに世話になるいわれはない」

警「祖父…?いやいや、そんな言い訳無理あるから。第一そうだとでもこんなはずーっと付回すとかおかしいでしょ?最近増えてるんだよね、ファンタジックで多少の年齢と見た目の差があるからってそう言って逃げようとする人」

刃「すると何か…貴様は、僕がいづなを傷つける、とでも言いたいのかの？」

警「いや、そこまでは言ってないでしょ?とりあえず署まで来てもらえるかなって」

刃「あまり。……調子に乗ってくれるなよ人間風情が。町内会に身をおいてはいるものの、僕はそこまで人間に寛大ではないのだ。…かつて、三条の坊にも気まぐれで手を貸してやっただけの事、貴様なぞ…すぐにでも」

い「じいじ!!!!」

い「こんなとこでどうしたんだ?もしかして迷子?送ってあげてあげるからいっしょにかえろ!」

刃「…いづな。…そうじゃな、共に帰ろう。ああほら、畜生(ちくしょう)びすけつとをやろうな」

い「わーい!」

刃「今日の所は見逃してやろう、いづなに感謝するんじゃな」

警「ひ、ひい…!」

い「あれだれだったんだ?じいじのともだち?」

刃「違うぞ～

11月26日収録生放送用声劇台本③

11月26日収録生放送用声劇台本③

「やきいも」

台本作成：森山わん太郎(@MoriyamaWantaro)

蓮華：「――落ち葉はこの位、でしょうかね。塾の庭に溜まった落ち葉をどうしようかと思いましたが、確かにこれなら程よく処理出来そうですね。――さて。そろそろあの子たちも来る筈なのですが……」

ましろ：「こんちゃー！」

フェルン：「宅急便で一す！」

ましろ&フェルン：「嘘だけど！」

要：「ましろサン、フェルンサン、先行かないでくださ……おぉー！ 落ち葉一杯ありますね〜！ これだけあったらお芋もたくさん焼けそうです！」

蓮華：「あ、皆さん来ましたね。いらっしゃーあれ？ まおくと鼎くんは？ 姿が見えませんが……」

要：「ああ、それなら――」

まお：「――おいクソ狸！ 速攻縁側で寝ようとしてんじゃねえ！！！」

鼎：「うるさいなあ……焼き芋するのなんて時間かかるんだから、別にいいでしょ……」

まお：「そう言う事じゃねえだろ！！！」

ましろ：「あらやだ奥さん。あのこ他人(ひと)の家で怒鳴り声あげてるワ」

フェルン：「あらやだほんと。なんて静かなのかしら！」

要：「早くお芋焼きましょう！ ボクお腹すきました！」

蓮華：「あらあら。それでは、要くんも待ちきれないようですし、もう落ち葉に火を点けましょうか」

ましろ：「あ！ それなら穴掘ろうぜ、穴！ 水で濡らしたキッチンペーパーと銀紙で包んだサツマイモ入れて埋めて、その上で火つけんの！ 多分土臭くなっとうまそうじゃなごめん嘘じっくり蒸されて絶対美味いって！」

フェルン：「何それすっげーマズそう！！ シャベル持ってくる！」

要：「え、おっきいのはスコップじゃないんですか？」

鼎：「どっちでもいいでしょ、そんなの……っていうか、それ時間かかんない？」

ましろ：「すっげえかかる！ 半日とか！！！」

鼎：「じゃあ駄目じゃん、普通に焼きなよ普通に」

フェルン：「なーなー！ 落とし穴埋めようぜ落とし穴！ まおが落ちそうなヤツ！！！」

要：「いいですね！ どっちが大きい掘れるか競争しましょうよ！」

まお：「自由かお前ら！！ あと穴に芋埋めんのも却下！！！」

ましろ：「なんでだよ！ まおのケチ！ あほ！ ねこ！」

まお：「最後悪口じゃねえよ」

鼎：「ばーかばーか探偵ー」

まお：「だから最後悪口じゃねえよ！！ っつーか便乗してくんな！」

蓮華：「はい皆さん、もう火はつけましたからね。危ないですからこの周りで遊んじゃだめですよ。いいですね？」

ましろ・要・フェルン：「はい！」

まお：「誰が遊ぶかよ」

鼎：「まおくんが一番危なさそうなんだよなあ」

まお：「あ” あ”？」

まお鼎除く一同：「あー……」

まお：「なに納得してんだよ！！？」

ましろ：「だって……なあ……」

要：「まおサンですしね……」

蓮華：「まおくん、本当に気を付けてくださいね……？」

フェルン：「財布落としてそのまま燃やしそうだし、まおも火の中にダイブしそう」

まお：「俺はおっちょこちょいか！
あとカラスお前こんなときばっか本音言ってんじゃねえよ！！？」

鼎：「そうさせる位まおくんがヤバいんでしょ」

まお：「お前ら月夜ばかりと思うなよ」

ましろ：「こわ！ 犯罪予告だ！！ あれだろ、レンゾクサツジンハンがまおで、崖の上でフナ〇シに追い詰められるやつだ！！！」

鼎：「フナムシ？」

要：「崖の上のフナムシ」

フェルン：「まおの強迫よりも怖いフナムシ」

鼎：「フナムシ以下のまおくんって……」

蓮華：「え、まおくんはフナムシさんなんですか……？」※本心から言っている

まお：「お前ら」

要：「それよりそろそろお芋焼きませんか」

ましろ：「おっけーまかせろおら芋投入だおらあ！！！」※あほっぽく勢いだけで

鼎：「ちょっとましろさん火の粉舞うじゃん芋放り投げないでよ」

要：「まだ焼けないんですかね？」

まお：「今入れたばっかだろうが」

蓮華：「あはは。それでは先に、お菓子か何かをつまみながらお芋が焼けるのを待ちましょうか。何か欲しいものはありますか？」

鼎：「てんぷら」

要：「おいなりさん！」

フェルン：「栗まんじゅう！」

ましろ：「マシュマロとクラッカー！」

まお：「お前らこの後芋食うってわかってるか？」

蓮華：「はいはい、ちょっと待っててくださいね。天ぷら、おあげ……あ、まおくんはツナ缶ですよ？」

まお：「お前ら揃いも揃って俺にはとりあえずツナ缶渡せばいいって思ってるだろ？」

蓮華：「え、いないんですか……？」

まお：「いる」

数時間後

しだら：「——遅くなってしまってますみません。仕事が長引いてしまったもの……で……——あの、どうして塾の庭がこんなに穴だらけなんですか？ クレーターのようになってますが……」

ましろ：「すげえたのしかった！！！！」

要：「ボクとましろサンとフェルンサンで、誰が一番早くたくさん大きい穴が掘れるか競争したんですよ！」

鼎：「もう掘る必要なさげだったけどね」

しだら：「そうでしたか。……要くん、フェルンくん、楽しかったですか？」

要：「はい！」

フェルン：「ちょ一つまんなかった！」

しだら：「それは良かったですね。でも危ないですから後でちゃんと埋めておくんですよ。ましろくん。そんな絶望したような顔をしても駄目です必ず帰りには埋めて下さいね。それで——…まおくんは、そんな穴でV字になって何を……？」

まお：「落ちたんだよ！！！！ 見て分かんたら！！！！」

蓮華：「お財布が穴の中に落ちてしまって、それを拾おうとしたら足場が崩れて、そのまま穴にお尻からはまってしまったみたいです。——でも、怪我は無いようで良かったです！」

まお：「それ以前の問題だろうが！！！！」

ましろ：「落ち着けよまお……ツナ缶、食うか……？」

まお：「いらねえよ！！！！」

要：「えっ……！？ まおサンが……ツナ缶要らない……！！！！？」

フェルン：「これもしかして頭打ってないんじゃないかねの誰か救急車————！」

蓮華：「え、ええ！！？ それは大変です！！ え、ええと、119番……119番……！」

まお：「話を大袈裟にするなおいコラ蜘蛛お前ほんとに電話しようとしてんじゃないかね！！！！！」

しだら：「あなたたち。ふざけるのはいいですけど、仲間内のノリで他の人を巻き込んではい

けませんよ。いいですか？」

ましろ・要・フェルン：「はい」

しだら：「蓮華さんも、通報などはしっかりと確認をしてからにしてくださいね。特に、彼らと居る時は。いいですね？」

蓮華：「は、はい、すみません……」

しだら：「よろしい。――ああ、そう言えばここに来る途中で、遅れてしまったお詫びもかねてジュースをいくらか見繕ってきました。どうぞ」

蓮華：「ああ、そんな気を使わなくてもよかったのに……」

しだら：「いえ、気持ちですから。それに――」

フェルン：「オレンジ、リンゴ、ソーダに乳酸飲料……それに牛乳が無い!!! 俺オレンジ飲まない!」

要：「ボク牛乳にします」

ましろ：「かなめお前そんな真顔で……あ！ 俺リンゴな!」

鼎：「リ↓ンゴ？ リ↑ンゴ？」

ましろ：「リ↑ンゴです!」

鼎：「あ、まおくん牛乳ソーダね」

まお：「いらねーよ!!!!」

しだら：「――ね？ 彼らは喜んでくれるかと」

蓮華：「ああ、それもそうですね……では、ありがたく頂戴します」

しだら：「いえ。むしろこちらこそ、お誘い有難う御座います」

まお：「つーか良い加減穴から出せやゴラァ!!!!」

要：「まおサンなんで自分で出ないんですか馬鹿なんですか？」

まお：「ケツから落ちて立てねえっつってんだよ!!! 察しろ!!!!」

蓮華：「あらあら……」

鼎：「うわダサ」

まお：「タヌキてめえ」

フェルン：「そんなに黙んなって、ほら手貸してやんねーから」

まお：「誰のせいだと思ってんだ」

要：「まおサンの不注意のせいじゃないんですか？」

フェルン：「それな」

まお：「お前らのせいだよ!!!!!!!」

フェルン：「まお静かすぎ、カルシウム足りてるんじゃないの？ それともツナ缶食べない？」

まお：「なんでこのタイミングでいると思ったんだよ」

フェルン：「まおだから……」

まお：「カラスてめえ爪刺すぞ」

フェルン：「やめて！！！！！！！！」※本当に怖い

鼎：「ねえ、芋もう焼けたんだケド」

ましろ：「芋！！！！」

要：「焼き芋！！！！」

フェルン：「焼けてない芋！！！！！！」

まお：「焼けたっつってんだろ！！！！」

しだら：「皆さん、火傷しない様に気を付けて下さいね。――ええっと、トングは……」

蓮華：「あ、トングはこちらにありますよ。お芋、取りますね」

しだら：「ああ、有難う御座います」

蓮華：「いえいえ。それでは、子供達から順番に……はい、要くん。どうぞ。熱いですよ」

要：「おいもいもいもー！」

ましろ：「あ、だらさんだらさん！ これ！ 焼きマシュマロクラッカーで挟んだの！ めちゃくちゃうまいの！！！」

しだら：「おや、くれるんですか？ 有難う御座います」

要：「あ！ ずるい！ ボクにも下さいよ！」

ましろ：「要さっき食べただろ！？」

鼎：「あ、ましろさんこっちにも頂戴」

まお：「お前ら芋食べよ」

フェルン：「うわつめたっ！！！！ この芋すっごい冷たっ！！！」

ましろ：「お前それ炭だからじゃね嘘だけど今焼けたばっかだしそりゃ熱いよなー」

まお：「今更だけどなんで会話出来るんだよお前ら」

要：「あふっ！ はふっ！ ほ、ほのほいも、ふっごふあふふいれふっ！ へろあまふへおいひいれふっ！ はふ！」

鼎：「何言ってるのあんた」

しだら：「このお芋、すっごく熱いです。でも甘くておいしいです……では？」

要：「そうれふ！」

鼎：「分かんないよ」

蓮華：「しだらさん、よくお分かりになりましたね」

しだら：「何となく、ですよ」

鼎：「あつつつ……はふ……あむ……うん、おいしい」

まお：「はえーよ！！！ つーか食べねーよ！！！ あつつい！！！！」

フェルン：「だろうな」

ましろ：「さっきまで火の中にあったしな」

鼎：「むしろまおくんはなんで焼き立ての芋食べようと思ったの？ 熱いの分かってるでしょ？
もしかして馬鹿なの？」

まお：「タヌキこのやろう」

蓮華：「それでなくてもまおくんは猫舌さんですしねえ……」

しだら：「無理をしないで、ゆっくり冷ましてからでも大丈夫ですよ」

ましろ：「アイスとかと一緒に食べたら冷たくなって食べられるかもなー？」

蓮華：「ああ！ バニラアイスなら、確か冷凍庫にありました！」

要：「蓮華サン！！！！ アイスイ！ ボクアイス食べたいです！」

フェルン：「芋にアイス乗っけようぜ！」

鼎：「なにそれ絶対美味しいじゃん蓮華さん頂戴」

ましろ：「アイスイ！」

まお：「俺のも持って来いよ」

フェルン：「まおのにはツナ缶混ぜようぜ！」

まお：「ふっざけんな！！！」

要：「じゃあツナ脂入れましょう！」

まお：「お前は油揚げでも入れてろ！！！」

要：「は？ そんなのお揚げさんに失礼じゃないですか何言ってるんですかまおサンほんと何言
ってるんですか頭おかしいんじゃないんですかお揚げさんに謝ってくださいホラはやくしてくだ
さいよ」

まお：「おまえこのやろう」

しだら：「……ふふっ」

蓮華：「？ しだらさん、どうかされました？ ーなんだかご機嫌ですね」

しだら：「ああ、いえ……なんだか、彼らを見ていると……こういうのも、悪くは無いな、と」

蓮華：「ああ……確かにそうですね。ふふ。でも、しだらさん。この平和の中には、僕やアナタ
も入っているんですよ？」

しだら：「……そう、ですね。……なんとも心地のいいものですね」

蓮華：「ええ……本当にその通りです。ーさて、僕はアイスを持ってきますね。しだらさんは
、何かご入用ですか？」

しだら：「では、温かいお茶を頂けますか？ 銘柄はお任せいたしますので」

蓮華：「わかりました。では、少しあの子たちを見ていて下さいね」

しだら：「はい、頼まれました」

フェルン：「うおー！！！！ バター付けた芋まっず！！！！ ぱっさぱさで味がしない！！！！
次のもやろう！！！！」

鼎：「バターなんてどっから出したの」

フェルン：「ましろが持ってなかった」

鼎：「用意周到」

ましろ：「バターの塩っけと油分うまい」

要：「お芋がねっとりで美味しいです！！！！」

まお：「カラスお前次もやるのかやらないのか分かりにくいんだよ！！！！ つーかまだ熱い喰えねえ！！！！！」

鼎：「まおくんおもしろ」

まお：「見せモンじゃねえんだよ！！！！」

しだら：「蓮華さんを待ってゆっくり頂きましょう。ね？」

フェルン：「なーなーましろの分の芋食べていいー？」

要：「あ！ ボクも食べたいです！」

ましろ：「は！？ 駄目だって！ それ俺の一！」

しだら：「ほら、あなたたち、そんなに暴れたら人にぶつかりまー」

鼎・要・ましろ・フェルン：「あっ」

まお：「あ”？」

しだら：「あ」

まお：「あぁ”ー！？」

要：「およー……。まおサンまた穴に落ちましたね……。？」

フェルン：「……こんなあっさい穴、いつ掘ったんだ……。？」

鼎：「2メートルはあるんじゃないの、これ……」

ましろ：「さっき！！ でももっと深く狭く掘りたかったし理想にはほど遠い」

鼎：「ましろさんその穴に対する執着なんなの」

フェルン：「兎の本能丸出しでウケない」

しだら：「まおくん、大丈夫ですかー！？」

まお：「てめえらマジで後で覚えてろよゴラァー——！！！！！！」

ましろ：「あっ無事だ」

鼎：「流石猫」

要：「やっぱり怒ってますかね？」

フェルン：「激おこ」

ましろ：「ぶんぶん丸」

鼎：「ムカ着火ファイヤー」

要：「なんたらドリーム」

蓮華：「皆さんアイス持って来ましたーあら？ 数が合いませんねえ……？」

フェルン：「まおー、ツナ缶いるー？」

鼎：「サービスで醤油とマヨネーズかけておいてあげるよ」

まお：「いるか！！！！！！！！」

おわり